
「天使の唄」

風音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「天使の唄」

【Nコード】

N4317B

【作者名】

風音

【あらすじ】

今年の冬は寒いらしい。11月なのに。文化祭前なのに…。佐倉勇一は考える。病に苦しむ思い人が文化祭を楽しむ方法を。緋水美月は考える。思い人に負担をかけない方法を。そして、考える者はもう一人…。現代的恋愛ファンタジー。

「プロローグ」

世界が、世界を構築する全てが、ただ一人の「者」によって作られているのならば、

それはすごく、悲しいことなのではないのだろうか。

人の運命は決められていたとしたら。それを知らずに人は生きているとしたら。

やはりそれも、悲しいことなのだろうと思う。

運命という網に縛られずに生きている人がいたとしたら。

その人は幸せなのだろうか？ それとも。

思い出は、いつも綺麗なものしか残らない、とよく言われている。小さい頃の記憶を思い返せば、幾つか思い当たる部分があるかもしれない。

例えば、初めて自転車に乗れた記憶。

例えば、テストで初めて百点を取れた記憶。

例えば、友達と小さい頃、日が落ちても遊んでいた記憶。

たわいもない話で笑いあった記憶。

ケンカして泣きあって。そのあと仲直りした記憶。

そして。

死んでしまった人との思い出の記憶。

思い出は、いつも綺麗なものしか残らない。

どこかの本で適当に流し読みをしただけなので、あまり詳しいことはよく分からないが、人間の頭の中というものは、悪いこと、辛いこと、苦しいことは防衛反応というもので大体は消えてしまう。楽しかったこと、面白かったことが優先されて思い出のスペースを埋めてしまうらしい。

何とも都合のよいつくりをしていると思う。自分も一人間だが、この事を聞いた時、「いやあ、ヒトの脳というものは実にあっぱれ

であるなあ」と幼心に思ったことがあった。

日の丸の扇子を開いて馬鹿踊りしたい気分である。

だけ。

だけど、それはあくまで一般論。

自分は違った。悪い記憶ばかりが優先されて根強く頭に残っている。

もともと良いことなんて少なかったから。

それはもう、記念すべき小学一年生の入学式になど出ていないし。公園の砂場で砂の山を作って、「トンネル開通」とやらもしたことがない。

記憶にあるのは、白い壁と白いベッドと白い服を着たおねーさんとおにーさん。

そして、長い長い夢の中で見た、白と黒の記憶。あれが自分の中で覚えている、最後の悪い記憶。今でも目を閉じるとおぼろげに現れてはぼやけてぐるぐる回る、嫌な記憶。

きっと、体に残る痕と共に一生残るのだろう。

単刀直入に言ってしまうえば、手術の合間に麻酔で眠らされて見ていた夢の内容なのだけ。

このように、自分にはほぼ「いい思い出」とやらないのである。ほぼ、なので、ないわけではない。消してはならない「いい」思い出もある。

それは大切な思い出であり、今の自分の性格は、この人との思い出が形成したと言っても過言ではないはずである。…多分。

だから、自分は鶴のように恩返しをしなければならぬのだ。

自分は子犬のように忠誠を誓うのだ。

例え何があるうとも…。

……いや、それは少し言い過ぎなのかもしれない。とにかく。

この人が人生のゴタゴタに差し掛かったり、捕まってしまうたりした時には、自分が側にいてあげて、助けになってあげようと、

そう思ったわけである。

「ある冬の日のこと」(前書き)

中学の頃にしたもの。……今よりなんかうまいような気がする。

「ある冬の日のこと」

高校二年の初冬の、この年一番の冷え込みの日であった。毎日毎日変わり映えしない退屈な授業を終え、佐倉勇一は私立桜緑学園の昇降口を出た。

なるほど、今日は寒い。制服の上にはコートを着ているし、マフラーと手袋は既に常備して置かないと多分凍え死んでしまうだろう。今思えば、朝のお天気お姉さんの妙な自信を鼻で笑っていた自分が恥ずかしい。空に雲がなければ少しはましかと思われるのだが、残念ながらどんよりと鈍色の雲が空全体を覆っていた。なんだか気が滅入ってしまう。

はあ、とため息をつきながら、勇一は外の部活の邪魔にならないよう、歩き始める。

決して勇一は部活サボリではない。一時的な帰宅部に属している。本来ならば演劇部であり、脚本を書きながら役者をこなすという充実した生活を送っていたわけなのだが、その生活を捨てなければならぬほどやらなければならないことが、彼にはあった。

勇一は人と車のほとんど通らない道を黙々と歩き、学校の近くにある水口総合病院へ向かう。

いつも思うのだが、いくら都会に近いといっても田舎町であるここに、桜緑学園みたいな中高一貫学校や、水口総合病院のようなところ考えてもこの町に不釣り合いな大きい建物があるといいのかと思う。なにしろ、大きい建物などこの町にはこの二つしかないわけだし、あとは住宅街と商店街が広がるばかりだ。不景気な世の中と騒がれてはいるが、そんなことを感じさせない財政力がこの町にはある。裏金でもあるのではないかと深刻に考えてしまう。

そんなバカなことを考えながら、総合病院の自動ドアをくぐる。どんな種類かは知らないが、薬品の匂いが病院にきたなあ、と感じさせた。匂いが鼻を刺激して、思わずくしゃみが出てしまうのをこ

らえる。毎日来ているが、どうもこの匂いだけは慣れない。

院内は暖房が効いていたので、手袋とマフラーを取りながら、慣れた手つきでロビーの右手奥にあるエレベーターのボタンを押し、六階へと移動する。ほぼ毎日来ているので、目をつぶってもできる動作だ。

ちーん、という音と共に六階へと降り立つ。この階はほとんどが病室で、この時間帯はあまりにぎやかな時間帯ではなく、左右のどちらを見ても、白く、長い廊下が黙って道を伸ばしている。殺風景な印象を受けるが、病院が殺風景でないのもある意味怖い。

例えば、白い廊下がいやにカラフルでレインボーだったり。派手だな。

夜の暗くてただ非常口の緑のランプだけが灯るこの廊下とどちらが怖いだろうと考えたが、馬鹿馬鹿しいので思考を止めた。友人の森岡が、「なんで水口総合病院というでかい病院にさえもピンクやブルーの白衣のナースがいないんだっ！ 間違っている、この市は何かが間違っているぞお！」と嘆いていたのを思い出したが、それも止める。森岡ごと記憶の彼方まで葬り去る。

大体、『ピンクやブルーの白衣』という言葉からして間違っているだろう。

…白衣じゃないじゃんよ。ピンクやブルーだったら。

頭の中の森岡に致命的なツツコミを与えたところで、止めていた足を動かし始め、目的の病室を目指す。エレベーターから、左に曲がって三番目の病室。いつもここに来るまでにいろんなことを考えてくるのだが、今日は森岡の登場で疲れた。こういうのを人は気疲れと呼ぶのだろう。なるべく病室では元気な姿を見せたい。相手に余計な心配はかけたくないから。

ドアをノックする前に深呼吸を二、三回ほどして、気疲れを意識的に押さえてからノックをする。中から小さめの声で、「どうぞ」との返答が返ってきた。

「ちーす、美月。元気してるか？」

「元気じゃないです。元気だったら病院にいる必要はないと思うけど」

ドアを開けて病室に入って早々、いきなり皮肉を言われた。正論だから言い返すこともできない。

白い壁に、白いリノリウムの床。ベッドの近くに申し訳程度に置かれた物置き用と収納用を兼ねた小さな棚。上に置かれた色とりどりの花が引き立ってはいるが、基本的には廊下と変わらない殺風景な病室。

緋水美月は、青い水玉模様のパジャマを着て、白いベッドに上半身を起こして勇一の方を見ながら不敵に笑っていた。

彼は室内に数個あった丸椅子の上にバッグを置いて、その中からノートを数冊取り出すと、美月の頭をノートで軽く叩いた。

「素直じゃない。今日の授業分のノート、見せてあげないよ？」

「あ、それは勘弁してください。私から唯一の楽しみを奪う気？」

彼女はノートを勇一の手からひったくると、一冊目のノートを開き始め、真剣な顔で読み始める。勇一は美月の横顔を眺めつつ、彼女がノートを見終わるまで、勇一は今度の演劇のための脚本を仕上げるために棚の上にノートパソコンを置いて指を動かし始める。

この過ごし方が、ここ最近の日課となっていた。

美月が突然倒れたのは去年の夏のことだった。彼女も、心臓の機能が悪かったのである。

幼い頃からずっと一緒に、お互いに助け合ってきた勇一は、当然、彼女を見捨てることはしなかった。もともと勉強家だった美月のために授業をしっかり受けてノートを取り、彼女の勉強が遅れないようにもしたし、病室でボーっとしてはつまらないだろうと、部活の仕事に差し支えない程度に彼女の話し相手にもなったりしている。

病院での入院生活がいかにつまらないものであるかは、勇一もよく理解していた。

長い黒の髪。外で走り回るのは好きではなく、しかも長い入院生活のせいで雪のようにきめが細かく、白い肌。そして細い手足。顔立ちも整っていて典型的な和風美人と称され、学園では定評があったのだが、変に気が強いせいで見舞いに来た人を片っ端から追い出して、今では数人の『親友』だけがここに訪れている。人に気を使われるのが嫌いなくせに。

「勇一、どうかしたの？ 指が止まっているわよ」

美月のノートに落としていた目が、こちらに向かっていた。わずかに首を傾げている。

「もしかして、気分悪いの？ 今日は寒いつて言ってたから…」

「いやいや、次の文をどうしようか考えていてね」

人がいつもと違っていると必要以上にお節介を焼いてしまう人。

それが、緋水美月の真の姿。

勇一は考えを悟られないように慌てて指を動かし始め、リズムよくキーを叩きながら、場当たりで思いついた言葉で逃れようとする。彼女もさすがにエスパーではなかったのか、納得しつつ三冊目のノートを開く。

「そういえば、もうすぐ桜緑祭だもんね…。さつさと脚本完成させて劇の練習をしなきゃならないのかあ…」

「まあ、ね。これから忙しくなるからめんどくさいよ…」

「勇一はダメだなあ。普通はそういうところに青春というか生き甲斐を感じるものだよ？」

美月はぴつと人差し指を立て、姉が弟に諭すような口調で言う。

一瞬だけ、同級生のくせに…と思ったが、言葉の裏にある彼女の想いはすぐに読み取れた。

桜緑祭とはつまり文化祭のことで、まともな田舎町のここにとつては一年のうちで最大のイベントといっても過言ではない。もちろん、学園の生徒のほとんどは楽しみにしているし、実際自分も楽しみにしている節がある。

しかし、美月はどうかだろうか。

彼女が入院したのは去年の夏。つまり、去年も、そして三週間後に控えている今年の桜緑祭にも参加できないということだ。桜緑学園は中高一貫なので、彼女は中学の時に桜緑祭は楽しんでいるのだが、高校になってからは一回も楽しんでいない。あまりにも不憫だ。それに…桜緑祭の準備が本格的になったら、自分は今のように頻繁にここには来れなくなる。美月にノートを見せられなくなるのは痛い。彼女と話せなくなるのは痛い。

彼女の望んでいることをしてあげられないのは、すごく痛い。

キーを叩く指は止まっていた。去年は彼女に何もして上げられなかった。今年は何かしてあげたい。桜緑祭の日が来る前に、彼女の心臓に負担をかけず楽しませる方法を。

「また指が止まってる。勇一、今日は何かおかしいよ？」

「はは、そうかも」

こんな感じでは執筆も進まない。脚本を書くことを諦め、パソコンの画面から美月のほうへ顔を向けると、彼女の立てられた人差し指が勇一の額に当てられた。思ったよりも指は冷たく、じわりと寒さが背を伝って思わず身震いしてしまう。

「…指、冷たいんですけど。もう少し部屋の暖房効かせたら？」

「これ以上暖かくななんてならないよ。正常な体していないんだし、さ」

彼女は指を勇一の額から離し、病室に負けなくらい白い自分の手の平を見ながら、愁いを帯びた笑みを浮かべる。

その笑みが、どうにもやるせなくて、切なくて。見ていて心が押しつぶされそうだった。

気まずい空気が室内を包む。なぜこんなことになってしまったのだろう。きつと森岡のせいだ。あいつが今日のいろいろと日常や世間の事について考えていたのに、あいつの変な発言一つ雰囲気がおかしくなったのだ。明日学園へ行ったら真っ先にあいつの息の根を止めなければなるまい。

「そういえば、今回の劇のテーマって何なの？ まだ聞いてなかったけど」

彼女も気まずい雰囲気を感じていたのか、静寂を打ち破るように話題を持ち出した。

「あ、うん。桜緑祭なら思い切り部費使っても何も言われないからね。かなり豪華に物凄い恋愛物でもやろうと思ってさ」

この市のおかしな財政力は桜緑祭にもかけられているらしい。

他の文化祭を見たことがないから判らないが、見たことのある人たちの意見から察するに、とにかく「すごい」らしい。何がどうすごいのか、自分には判りかねる所なのだが。

ただ、学園の講堂にある演劇に使える全ての設備を使えるのがこの時期だけなので、使えるだけの設備を使って人に見せられる最高の劇をやってみようかな、と思っているわけである。

「恋愛物：ね。勇一の作った脚本で今まで一番ウケが良いのが恋愛物だったもんね。がんばってよ。…あまり、妄想のしすぎはしないでね。引いちゃうから」

果たして、今は励ましか、けなしの言葉か。たぶん後者だろう。美月はクスクス、と微笑してから、時計を見た。そして、ノートを揃えて勇一に渡す。

「さてと、そろそろ勇一は帰宅の時間です。暗くなるのが早くなり始めているから、気をつけて帰ってよね？ 交通事故にあって打ち所が悪くて脳死状態、なんて冗談にもならないですからね」

確かにそれは冗談にはならない。勇一は苦笑し、窓に目をやった。本当に暗くなり始めている。心なしか雲行きも怪しい。

「あらら、雨降りそうだね…。念のため傘貸してあげるよ。明日返してくれればいいから」

彼女も窓の外の雲行きの悪さを察知したのか、勇一がバッグの中にパソコンとノートをしまっている間に、ベッドの下に手を入れてごそごそと動かし、ほとんど使われていなさそうな真新しい薄い水色の傘を取り出した。

…どうしてそんなところにあるのかはあえて訊かないことにしておく。

「サンキュ。恩に着るよ」

バッグの紐を肩にかけ、傘を受けとると、病室を出ようとしてドアノブに手をかける。

ドアノブに目を落とす。言わなければならないことがあった。

「今年の桜緑祭、美月も楽しめるように、オレなりに何とかしてみる。だからさ、期待して待って欲しいな」

「うん、ありがとう。…ごめんね。私はいつもあなたに迷惑をかけちゃってる」

「馬鹿。美月がそれを言ったら、オレはすごい迷惑を君にかけてることになるんだから」

「ふふ。そうかもしれないね」

美月は小さく笑う。ドアノブに目を落としたままなので、彼女が本当に笑っているのかは判断のつかないところだ。

「だから、そんなこと言うなって。美月は絶対治る。少なくともオレは信じてるからさ。」

こっちも頑張るから、そっちも頑張ってよ」

「うん…。頼りにしてるよ、勇一」

一度だけ振り返る。だが彼女は窓の方を向いていて、表情をうかがい知ることはできなかった。彼女の背中が、寂しく思えた。「任せておいてよ」と小さく呟き、勇一は病室を後にする。

「雨天、非日常」

病院の入り口まで来ると。既に雨がポツポツと降り始めていた。

美月から借りた傘を差して家に向かつて歩き始める。家までは徒歩で二十分くらい。田舎町らしく夜になってもほとんど街灯がないのでかなり暗く、そのせいか歩く人も少ない。夜道というのはどこか不安感を覚えるもので、できれば勇一も早く家に帰りたかった。

雨のせいで寒い気候もさらに寒く感じる。マフラーをしているのに冷気が首筋に入り込んできて、体も暖かくなならない。歩くスピードを少し速めて、歩く時間を短縮する。

どうやって明日森岡の息の根を止めてやろうか。

どうやって美月も楽しめる桜緑際にしてやればいいのか。

今のところ、勇一の頭にある考えはこの二つだった。できかけの水溜まりを通学指定に靴で踏みつけて水しぶきを飛び散らせながら歩を進める。さすがに道路はコンクリートで舗装されているので靴が泥まみれになるようなことはない。と言っても、濡れはするが自分の頭は一つのことを考えると言うのはどうにも苦手みたいなのだが、二つのことを頭に思い浮かべるとものすごい処理能力を発揮する。

事実、通称『森岡滅殺計画』の半分は完成し、『美月お祭り参加計画』は三分の一は思い当たっていた。後者はともかく、前者は明日実行すればよい。

傘をくるくる回しながら、明日の楽しみを意味を実感する。無事計画が成功した暁には、たっぷり香典を包んでやろう。

学園を過ぎて、十字路を右に曲がる。曲がった先にはきつと大正とか昭和の初めに立てられたのだろう、木造の二階建ての大きなお屋敷がある。母親の話では、昔ここ周辺の土地を管理していた地主の家らしい。

勇一はこの屋敷に何人の人が住んでいるのか知らない。一人は知っている。毎朝登校時、この辺りをぶらぶら散歩している、腰の曲がった今にも死にそうな爺さん。最近桜緑再準備のため、少し早く登校しているので姿を見ていないが、きっと今朝も、あのおぼつかない足取りで散歩していたのだろう。

なぜこんなことを今考えたのかというと、屋敷の前に客人がいたからである。暗くてよく見えないが、門の前で立ち止まっている人影は確認できる。少しずつ歩を進めていくと、だんだん輪郭がはっきりしてきた。

そして、姿が見えたところで勇一はその姿を不審に思い歩みを止めた。

急に、雨が傘にあたる音が大きくなった気がする。

女の子が、この寒くて雨の降る闇の中、開かれることのない門を見つめていた。

誰が見ても不審に思うだろう。傘を差していない。

つまり、彼女は雨ざらしになっているのだ。

それだけでも寒そうなのに、服装がさらに寒そうだった。というか奇抜だ。

キヤミソールを少し大きくしたような服しか着てないように見える。いや、実際は腕にも膝にも衣類は着ているのだが、どう考えても冬の夜にその格好でいたら寒いだろう。

自分だったら、真っ先に風邪を引くかもしれない。

いや、あんな服夏でも着るつもりはないけど。

ていうか、服といい、傘を差していないといい、あの子は風邪を引かないのだろうか？

どんな表情をしているのかと思ったのだが、暗くて確認できない。髪形がツインテールを言うことと、体のライン的に、自分よりも年下と推測することができる。

では、なぜこの女の子が開かれない門の前に立っているのだろうか予測してみる。個人的には、あの死にかけ爺さんの孫娘というのが一番有力な説だと思う。しかしあの爺さんに、悪く言えばこんな非現実な格好をした孫娘がいるだなんて……。世の中はミステリアスに創られているなあ、と感心してしまう。

とりあえず、この女の子を爺さんの孫と仮定した所で、こんな所で一体何をしているのか、という疑問だけ残った。あんな格好で傘も差さずに雨ざらしになっていて。

ふと屋敷の方を見る。自分の身長より少し高めの塀に囲まれていて、しっかりと確認できたわけではないが、多分八十パーセントくらいの確率で屋敷の明かりは一つも灯ってはいなかった。

おかしい。

勇一はここまでできてようやくこの考えにいたった。

最初は頭の片隅にあった考えが、今は頭全体を占拠している。

何かがおかしかった。自分の予測や推測は全部外れている気がする。

静かに降る雨の闇の中、勇一は寒さも忘れ、今を現実ではないのではないだろうか、と認識し始めていた。

何分間の間立ち止まっていたのだろうか。呆然と女の子を見ていた勇一ははっと我に返り、自分はなぜただの棒っきれのように突っ立っているのだ、と自己嫌悪に陥る。

思い切って声をかけてみようか？

しかしなんと訊けばいいのだろうか？ 門をただ見つめてぴくりとも動かない女の子に、『あなたは誰ですか？』と訊くのは馬鹿馬鹿しい。『何してるの？』と訊くのも微妙だとは思うが、この言葉に以外に思いつかなかった。

勇一は決意して女の子の方へ向かって歩き出す。本当に動かないので、等身大のフランス人形みたいな子に声をかけるのは、なかなか勇気のいることだ。だがこの子に自分が不可抗力といえ、自分が見ていたことを言わなければ、なんとなくアンフェアみたいで罪悪

感が残る。

後々の後悔を残さないために、勇一は息を吸い込む。

女の子は、勇一に未だ気がついていない。すぐ後ろにいるというのに。まるで最初から人間に興味がないかのように。

彼女の背中からは、例えようのない莊嚴な雰囲気を感じ取れる。

勇一が言葉を発したのと、女の子が一步前へ足を踏み出したのは、ほぼ同時だった。

「ねえ君、こんな所で、何やってるの？」

なんか下心見え見えの軟派が街で適当な女の子に声をかけるセリフと同じ感じがする。

だが声をかけることができた。女の子は本当に勇一の実在に気がついていなかったのか、全身を震わせてこちらを振り返った。

大きく見開かれた彼女の瞳と女の子と目が合う。

……視界が一瞬、真っ赤になった。

……彼女の瞳は、紅かった。

予想外の事に、思わず怯んでしまった。まさか瞳が紅いとは考えもしなかった。彼女は、勇一のそんな考えはお構いなしに、目はこれほどかというくらい大きく見開かれ、口も半開きにして彼を見ていた。声をかけられて驚いているようだった。

「……オレの顔に、何かついてる？」

勇一は女の子に自分の顔を見てそんな反応をされたのが、正直ショックだった。顔にそんなに自信があるわけではないが、さすがに多感なお年頃の心にグサリとくる。それでも彼はめげないで次の反応を待った。

しかし彼女は、勇一の質問には答えず、大きく見開かれた瞳を化け物を見るかのような目つきに変えて彼をつま先から頭のとっぺんまでを人を品定めにするように見た。

そして。

「アナタ、私が見えるの？」

「へ？」

言っていることの意図を理解するのに数秒かった。彼女はつまり、「あなたは私の姿を見ることができのですか？」と質問したのだろう。もちろん答えはイエスである。視覚障害者ではないのだから。

「とりあえず…、こんな雨の中で傘も差さずにいたら、風邪引いやうよ」

勇一は傘を自分だけではなく彼女の雨よけにもなるようにもって行くと、バッグからスポーツタオルを取り出して、女の子のツインテールの頭の上に乗せた。

ここにきて、彼女の髪の色は珍しいことに気づく。普通は単色が普通と思うのだが、彼女は白と黒に分かれている。しかもテールごとに律儀に色が分かれている。

彼女は例も言わずにしつとりと濡れた頭をタオルで拭く。よく見れば、彼女の服も黒と白で分かれていた。服だけではなく、ソックスも、靴も同じ。片方が白で、片方が黒。どこかの家から漏れる光で、ぼんやりと確認できる。

一番目を惹いたのは、彼女の首についている首輪なのだが。

「にしても、自分も使い古されたようなセリフだったけどさ、君も負けないくらい使い古されたセリフだったね。オレは、君の姿を見ることができ。で、オレの質問にも答えてほしいんだけどな」

勇一は、頭二つ分くらいはある身長差を解消するため少しかがんで言う。

「待ってる」

彼女は勇一に顔を見られたくないのか、うつむきながら再び彼から背を向けてしまう。

「待って、何を？」

「アナタには、関係ない。どっか行って」

カチンときた。年下（だと思う）のくせして、タメ口どころか命令口調で拒絶反応をされた。変なプライドが体の動きを支配する。

この場を動かさなくなかった。

頭のどこかで、この状況がどこか非現実めいているぞ、と警鐘を
発しているが、理性でそれを却下する。

「そう言われると、嫌でも君が何をしようとしているのか見たくな
るんだけどな」

「勝手にして頂戴。私にはやるべき事があるから、邪魔しなければ
問題はないわ」

やるべきこととは、何なのだろう。こうしてただ門を見つめて立
っていることがやるべき事なのだろうか？

と、勇一は考えてみたが、どうやら違ったらしい。

女の子は足音もなく突然歩き出し、礼儀も何もなく、門を静かに
明けて、屋敷の敷地内に入って行ってしまった。

「え、あの、普通インターホンとか押すものじゃないの？ 君、こ
の家の子なの？ ねえ！」

勇一は慌てて彼女を追いかけて無礼と知りつつも敷地内にはいつ
てあたりも見回し、屋敷を見上げる。屋敷はやはり明かりは灯って
おらず、さらに人の気配が存在しなかった。

辺りのあまりの暗さに、思わず背筋は寒くなって震えてしまう。

冷氣とはまた別の寒さだ。鳥肌が立つ。暗闇の中の孤独は、どこか
に一人で取り残されたという戸惑いと恐怖感を覚える。こんな所に
ずっといたら兎みたいに心細さで死んでしまいそうな気がしてくる。

勇一は気を奮い立たせて、暗闇の中目を凝らして女の子を探した。
どこにもいない。

おかしい。もう一度よく探してみる。やはりいない。屋敷の中へ
入って行ったのだろうか？ いや、少なくとも、物音は聞こえなか
った。裏へ回ったのだろうか？ 彼女はそんな足が速いのだろうか
？ 何かが、おかしい。

何かが、おかしかった。

「彼のファンタジー」

この状況、どこか非現実めいているぞ。

本能在、頭の中でそう自分に語りかけてきている。これから何が起こるのか、全く予想がつかないのではないか。自分が安全を確保できる手段は一つだけ。即刻この場から立ち去ってしまうこと。本能はさらに言う。きっとパラレルワールドにでもミステリーゾーンにでも一歩足を踏み込んだに違いない。今引き返せばまだ間に合うのだ。

暗闇の中で、孤独から来る恐怖感とは違う恐怖感が勇一を襲う。

傘を持つ手が震える。

引き返そう。あの女の子は幻だ。きっとそうなんだ。今この屋敷から出れば。日常に戻ることができる。うん、そう。引き返そうか。振り返った。

歩もうとする足が止まった。

目の前に、さっきの女の子が立っていたからだ。

出口は塞がれた。もう、平凡な日常には戻れないかもしれないらしい。

「やるべき事は終わった。ホントは帰らなければいけないけど、私はなぜアナタが私を見ることができるのか興味を持った。アナタは……ただの人間じゃない」

「残念ながら、普通の人間なんだけど」

「嘘ついちゃ駄目」

女の子の顔はタオルで隠れていたが、その声は外見年齢に反してはつきりと芯の通る声だった。フランス人情のような出で立ちをしているくせに、日本語が上手い。

しかし、初対面の子にあなたは凡人じゃない呼ばわりされ、しかも確信を持たれたように嘘をつくと言われた。

でも、確かに、この子の言っていることは、例え当てずっぽうだ

つたとしても当たっているのかもしれない。

「……分かった。本当の事を言うよ。だけどその前にオレの質問にいいかげん答えて欲しいんだけどね」

交換条件。自分の手元の情報を生かして、この子は一体何者なのかを聞き出さなければ。

日常へ戻ることは半分諦めかけていた。ミステリーゾーンでも、パラレルワールドでも、足を踏み入れたなら出てしまうのは邪道な気がする。よく自分は普通の人が経験しない事をいろいろ経験して来たな思っているが、まさか常識外の事を経験するとは思っていなかった。思っていなかったが腹は決めた。

自分でも驚きだ。数瞬前怖がっていた時とは偉い違いだ。自分の環境適応能力はもはや才能だな、と思ってしまう。しかし。

「じゃ、いい」

女の子はこの言葉で全てを拒否した。なんと言うか、気難しくて美月より扱いに困るタイプだ。とりあえず事情を訊いてみる。

「なんでそんなに君は自分の事を話したがらないの？ 話さなければ何も判らないよ？」

「主の命令。話しちゃ駄目って言ったから。私は主の命令は守らなければならぬ」

「……主？」

彼女は相も変わらず勇一と顔を合わせようとしない。声は無感情そのものだし、外見より大人びていると思ってしまう。だがそれが、主従関係故だとは。

「そっか、なるほど。事情があるなら、仕方ないね」

初めてこの子に親近感がわいた。得体の知れないフランス人形の人間らしさをひとかけら、知ることができたから。感じていた非現実さが、ほんの少し現実さを取り戻す。気のせいかな、雨の勢いも弱くなった気がする。

「ただ、どうしても私のことを知りたいなら、明日、ここに来てみ

るといいよ。私という存在が何の役割を果たしているか、少しは判
ると思う」

私の口からは言えないけれど。そう言葉が続くと思った。彼
女の言葉には先程とは違う神妙さがあり、言っていいべきか、とい
う困惑した表情をしていた。勇一にとっては、彼女が 自分に自分
の事を伝えようとしてくれているのがなんとなく嬉しかった。

恐怖感はなくなっていた。目的も変わっていた。雨もやみ始めて
いた。

彼女は遠回しにも自分の事を伝えようとしている。交換条件だ。
自分も遠回しにでも言わなければアンフェアになってしまう。何か
ないのかと、神経を集中させる。

「じゃ、オレはもう行くよ。あー、そうだ。君の名前を教えてください
る？」

「テルル。…このタオル、明日あなたを見たら返しに行く」

「分かった。じゃあテルル、君がこの屋敷の住人じゃなかったら、
速くこの屋敷の敷地内から出た方がいいよ」

歩を進める。束の間の日常に戻るために。今日と明日は、見る
世界も過ごす世界も一味も二味も違うと思う。
できるだけ、さりげなく。遠回しに。

「今から八分と三十七秒後、この屋敷に人が来るからね」

彼女がどういう反応をしたのかは判らない。何も気付かなかった
のかもしれない。

門を出た所で、最早意味の無い物となっていた、開かれた傘を閉
じる。今日は疲れてしまった。まずありえないと思ったことが多々
ありすぎた。

きつとこれは、森岡のせいに違いない。
うん。きつとそうだ。

勇一はほとんど罪のないだろう森岡へ思いを馳せながら、帰路を

急いだ。

「下僕」

「勇一！ お前は桜緑祭の店、何出したい？」

翌日、いつもと変わらず二年四組の教室に入り、一時限目と二時限目を見事な色ペンのしようと巧みなまとめ方によってノートに写し終わった、休み時間のことだった。級長の二ノ宮は窓際の前にある勇一の席へ来て、ノートの切れ端とシャープペンを手に勇一に質問してきた。

「店？ ああ、模擬店か。そうだなー…」

数学のノートと色ペンを整理しながら考えてみる。二ノ宮はアンケートの途中結果を見ながら、「今の一番は焼きそば屋で、その次が喫茶店だな」と参考意見を出してくれるが、なんとなく、どっちでもいいような気がした。

「んー、じゃ、喫茶店に一票。飲み物出すだけの方が楽でしょ？」

「了解。ふむ。さすが勇一。弱き者の味方。長い物に巻かれないなあ」

褒めているのかけなしているのかよく判らない発言をしながら、彼はアンケート集計紙であるノートの切れ端の『喫茶店』と書かれた隣に正の字の四画目を付け足す。

次の授業で使う資料を取り出そうとしてバツグを覗く。常備のノートパソコンを見た時、「あ」と呟いた。

「二ノ宮、オレに模擬店云々を聞くのはいいんだけどさ、そんな手伝えないと思う」

「どうしてだ？ …もしかして、サボりか？」

二ノ宮はペンで自分の肩を叩きながら苦笑する。勇一もつられて笑う。

「部活だよ。演劇部だしさ。今も脚本書いてる途中だし、書き終わったら部員の指導や、自分も演じなければならぬし。ま、当日まですこぶるハードな日々が続くのは間違いないと思うよ」

桜緑祭は一応は文化祭という名目があるので、ちょこちょこ真面目に文化祭用の研究発表などの掲示や、部活の活動の記録の掲示をしている所もすっかりある。演劇部はそこでの主力的な役割があり、桜緑祭でも重要な「イベント」の一つでもある。

「そういえばそうだったな……。まあ、俺たちはお前一人が欠けてもやれることなんだ。演劇はお前が欠けてちゃ成り立たない。くれぐれも俺たちのことは気にしないでいいぞ」

「あ、でも、休憩時間にならずに手伝えるよ？　せつかくクラス単位での出し物だしさ、何か手伝わないと悪いよ」

去年は脚本を一人で書かなくて良かったので、クラスの出し物であった「コレが究極のカレー！　フラインド」（命名は森岡）とかいうフライドチキンカレーとかフライドポテトカレーとかを取り扱った店を手伝えたのだ（なぜかよく売れた。今の世の人は油っこい物が好きなんだなあ。と実感した）。今回は準備の時から手伝えない分、当日に何かしなければクラスメート達に悪い。

「余計なことを気にするな。桜緑祭の演劇といったら、人気百貨店の超目玉品みたいなモンじゃないか。明らかにそっちを大事にしとけ。いいな？」

二ノ宮なりに気を使ったのだろう。わざわざ演劇に専念できるように手配してくれたのだ。ありがたいことこの上ない。演劇に美月お祭り計画が重なっていたのだ。苦勞の種をこれ以上増やすのもどうかと思った。

だがそんな気遣いも無視して、近くの席で二人の話を聞いていた数人の女子の軍団が、「それは聞き捨てならない」という顔をして身を乗り出してきた。

「勇一くん、お店手伝ってくれないの？」

「困るよお、うちのクラスの男子で料理で頼りになるの、勇一君と森岡君位なんだから」

そう、勇一は、美月の下僕としては学年に渡って知られているが、その他に知られていることがある。

一つ目。ノートを取るのが異常に速く、まとめ方がうまい事。

二つ目。料理が誰もが認めるほどうまい事。

前者は美月の下僕ということと合わせて知られている。そのうまさはテスト前になると多くの生徒が勇一の所にノートのコピーを取りに来るほどだ。勇一はこの事を誇りに思っている。かなりの時間を費やしている工夫した結果が実を結んでいるからだ。これからももっと精進しなければなるまい。

後者はどちらかというと今までに勇一と同じクラスになった者しか知らない。彼は和洋中、古今東西の有名料理を作ることができる。幼い頃から多忙だった両親に迷惑をかけないために身につけた技術だ。こちらの方が年季が入っているせいか、勇一は料理の腕には自信がある。だが、それで職について食べていこうという気はない。

そんなわけで、たまたま今年の春に会った実習のおかげで、クラスに知れ渡ってしまっていたので、こと料理関係のことは頼りにされていた。

もしかしたら、全て任せてしまいたいという黒い思いがクラスの中にあるのかもしれないが。

「ごめんねー、当日ならともかく、準備関係を手伝える自身は無いや」

「そうそう、勇一は忙しいんだから余計な仕事を増やすと迷惑なんだよ」

：なんだとよ、って、その科白は正確にオレの気持ちを表していないだろう、と思う。

確かに半分はそんな気持ちも入っているわけなのだが、そんなきつい言い方をしなくても。女子が怒るかもしれないのに。

勇一は、美月の事から、女子にめっぽう弱いことも有名である。

だから、二ノ宮は敢えて勇一に代わって断ろうとしたわけなのだが。

案の定というか、女子達は二ノ宮をジト目で睨みつけ、鼻で笑う。

「料理のできない級長が勇一の気持ちを代弁してもねえー！」

「何だと？ 代弁じゃないぞ。俺はこいつの言ったことを素直に表しているだけだ」

それは聞き捨てならないことだった。

気がついたら言葉が飛び出していた。

「いや、確かに仕事が増えると困るけど、迷惑なんかじゃないよ？」
言ってから自分の発言内容の愚かさに気がついた。女子達はここ

ぞと言わんばかりに食いついてくる。

「じゃあ、勇一くん手伝ってくれるの？」

「え、いや、それとこれとはまた別の話で…」

「だから、勇一は忙しいから無理だって言ってるだろ」

「あんたには訊いてない！」

得体の知れないものに威嚇されたように、二ノ宮は押し黙ってしまった。これだから、女子という存在は怖いのだ。

「で、どうなの、勇一君？」

数人が二ノ宮を威嚇して押さえつけている間に、残りが訊いてきた。

うん。見事な連係プレーだ。

「…なにか、見返りは？」

「君の他の仕事が遅れないようにクラスみんなで協力するように手配する。これでどう？」

「了解。店が何になるかによるけど、できる限りのことはするよ」

瞬間、集団は勇一と二ノ宮から離れ、たった今受け取った情報を発信するためにクラス中へ発信するためにどこかへ行ってしまった。隣では二ノ宮が『言わんこっちゃ無い』とでも言いたげに見下ろしていた。

これはもう、諦めるしかないのかもしれない。

二ノ宮は苦笑しながら、机にうつぶせになって動かなくなった勇一の肩に手を乗せた。

「お騒がせメント」

「いや、お人好しな性格が人生苦勞するって訊いたことはあったけど、生で現場を見ることになるとは思わなんだ」

「ごめん、せっかく氣を使ってくれて反感買っような役をやってくれたのに……」

勇一は顔を机につけたまま謝る。二ノ宮は軽く肩を叩いてやりながら、「人生なんてそんなもんさ」と達観な発言をする。彼も苦勞してきたのだろうか、この十七年間。

結局、桜緑祭まで冗談じゃない位の忙しさが自分に牙を向けたこととなる。美月の所に行けるのも、あと数日が限度かもしれない。

「そんなに心配するな。模擬店の方はあまり氣にしないでいいぞ。

いざとなったら森岡という最終兵器がいらっしやるから。…今日はサボっているみたいだがな。ご丁寧に荷物は置いてあるが。」

二ノ宮は主のいない森岡の席に目をやる。確かに机の上には盛岡のものである黒い革のバッグが無造作に投げ出されている。彼のサボりなど今に始まったことではないので、氣にしたものは今日は二ノ宮が初めてだろう。

「サボってないよ。ただ、授業に出られなくしただけ」

勇一は机から体をむくりと起こす。二ノ宮は直感的に予感がした。「正確には授業に出られなくしてあげただけ、って言った方がいいかもね」

ああ、またこいつは森岡に何かやらかしたのか、と思う。

ここは級長として、内容を聞いておかなければ。

いや、ただの興味本位なのだけれど。

「またお前はやらかしたのか……。で、今回は何したのか、級長に話さない」

勇一は森岡に暴力行為を行うのも今に始まったことではない。しかしことごとく失敗に終わっている。首を手刀で打って氣絶させた

り、クロロホルムで眠らせたりしても一時間後には爽やかな笑みで勇一の前に現れて勝利ゼリフを吐くのだ。

「はっはっは！ 甘い、甘いぞ佐倉！ その程度で俺を拘束できると思っただか！ まず俺を拘束したいのなら美人を連れて来い、美人を！ 緋水で構わないぞ！」

その後勇一のアッパーが森岡の顎を直撃するのだ。

二年のクラス替えが終わってから、こんな事は何度もあった。今ではクラスの名物の一つと化している。

そんな事は露も知らず、勇一は対森岡の時にしか出さないであろう暗い笑みを浮かべる。

「今回はスペシャルバージョン。口はガムテープで塞いだし、手足はロープで縛ってあるから、出られる確率はパーセントにも満たない。今日こそ……今日こそ、オレの勝ちだ」

二ノ宮は思う。勇一は、それは拉致監禁といって、現在の法律では罪の一つだぞ、と。

なんとも実も蓋もナベもないツツコミである。
言うべきだろうか。

しかしこうも思う。この二人はこの事を楽しんでる節があるから、どうせ言っても無駄であろうと、自分が勇一と付き合い始めたのは今年からで、森岡とは小等部からの仲らしい。余計な口出しは無用なのかもしれない。

授業開始の鐘がなる。休み時間が終わる。二ノ宮が「ほどほどにしておけよ」と勇一に言って席に戻ろうとした時、後ろの扉が乱暴に開かれ、その男は現れた。

整った顔立ちに、爽やかな笑みを添えて。この男の本性を知らない女子がいたら、真っ先に惚れてしまうような笑顔で。この笑みに、一時は一体何人の女子がだまされたのか。

黙っていればすくいい男なのに。黙っていれば。

「甘いぞ勇一！」

教室を闊歩して勇一の席の前まで来て発した第一声はこれだった。

ふと見れば勇一の顔には驚きと悔しさを必死で覆い隠そうと努力している様が見れる。

「俺を甘く見ては困るな！ 今日頑張ってくれたみたいだが、あの程度、所詮マフィアの銃撃戦に比べれば、大した事無いわ！ お前が俺に勝つ事は不可能なのだよ！」

そりゃあまあ、銃撃戦に比べれば大した事無いだろう、と二ノ宮が思ったとき、勇一のほうから「ぶち」という音が聞こえた気がする。

次の瞬間、勇一は森岡に見事なアッパーを喰らわせていた。今日のみぞおちの追撃付きだ。クラス中から、おお、という歓声が漏れる。二ノ宮もつい声を上げてしまう。

受けた相手が常人だったならアッパーを食らった後に仰向けにでも倒れて気絶して保健室送りでもなったのだろうが、相手は常人ではなかったらしく、ただらを踏みはしたが持ちこたえた。またもクラスからおおと声上がる。

「大体お前、マフィアの銃撃戦なんて知ってるのかよ？」

「ふむ。いい質問だな」

勇一の質問に森岡は不敵な笑みを浮かべて顎をしゃくった。周囲は一体どんな展開になるのだろうと息を呑んで勇一の机を見ていたが、勇一は森岡がなんと答えるか見当がついているようで、足の位置を微妙に動かしながら次の攻撃へ移る準備をしていた。

森岡は顔から笑みを消して真顔になる。

そしてついに言う。

「知るはずがないだろう」

勇一の足の的確に、そして見事に森岡の脛をとらえて打ったことは言うまでもない。常人離れた者も脛だけは効いたのか、「ぬおおー！」と言いながら当たった部分を押さえて床を転がる。さらに転がる最中に近くの机の脚に頭をぶつける。見るからに痛そうだった。

さすが勇一、森岡に対して容赦という感情が全く無い。

「どうしたんだ佐倉……。今日はいつも以上に気が立っているな。何かあったか？」

森岡は「痛てー、おー痛てー」と膝を折って脛をさすりながら勇一を見上げる。端から見ればいつもと換わらない彼の仕草に、僅かな違和感を感じたらしい。

「別に。特に何も無いよ。……それより先生、遅いよな」

「ああ、遅いな。何かトラブルでも発生したんじゃないのか？」

森岡は勇一の話題変えに素直に応じて、これ以上深くは追及しなかった。彼のこんな部分はありがたいと思う。

鐘が鳴って二、三分は立っていた。次の時間は数学で、教師は時間にいるさい谷口という二十七歳既婚教師だ。授業に一分でも出遅れるとその時間の質問には指し続けられるという罰則がある。なのにサボりはお咎め無しという変わったところがあり、最近は少し出てき始めたお腹が気になっているらしい。

それはともかくとして、時間に厳しい谷口が授業に遅れるなんて珍しいことだ。いつもなら始まりの鐘と共に扉を開けて、わざと授業に出遅れた永遠のライバル・森岡と問題のすさまじいバトルを繰り広げるはずである。出した問題を森岡は全て偉そうに答え、授業の終わりには大学の入試レベルの問題にまで発展している時も少なくない。

「トラブルって…ダイエットに失敗したとか？」

「いい意見だ佐倉。生徒の前に出てこられない体にでもなってしまうたか。それとも俺との勝負に怖気ついたか。どちらにしても傑作だな、こりゃ」

自分の想像に自分で笑う森岡。あながち笑い事でもないよな、と勇一はため息をつく。扉が静かに開けられた。二年四組担任春野仁美二十五歳独身が教室に入ってきて、森岡に席に着くように行っただ。美人の言う事は素直に聞く彼は瞬速のスピードで席に戻る。

「仁美せんせー、谷口先生はどうしたんですか？」

クラスの誰かが言う。仁美は教卓の上に名簿をおいて、困ったよ

うに手を頬につけた。

「谷口先生はお葬式のため今日はお休みです。だから、この時間は自習。…はあ、この一時間が一週間で授業の無い貴重な時間だからゆっくりお茶を飲みながらテストでも作るフリしてネットゲームを満喫しようと思ってたのに……」

仁美は頬から額に手の位置を変えて極めてどんよりとした口調で言う。彼女は教師陣の中でも保健室の佐藤、通称保健室のおねーさん二十三歳独身を抑えて学校の生徒（佐藤が男子に対して、彼女は女子から）高い人気を得ている事で名を知られているが、動揺にゲームである事も知られている。放課後近くのゲーセンによく出没し、給料の三分の一をゲームに使ったなどという逸話も残されているくらいだ。

と言うか先生、一応公務員なんだし学校でゲームやったら懲戒免職です。

クラスの中が自習だ自習だラッキーだね、というムードで騒いでいる中、勇一は頬杖について深い思考の海に足をつけたところだった。

「非日常の足音」

今朝、いつもと変わらないように何かが違う日常に、思わず足を止めてしまった。

昨日、テルルと名乗った少女と知り合った屋敷は、黒白の幕を張って、朝も早くから黒い服を着た弔問客が大勢来ていた。周囲とはかけ離れた非現実。一目でこの屋敷で行われているのは葬式だと判る。自分は屋敷の人間にとっては何の関係も無い人間なので、足を止めて眺めるだけで終わった。無論、この屋敷に何人の人が住んでいたのか、テルルがいたかどうかは知る由も無かったが、屋敷の所有主の姓が「今井」という事だけは知ることができた。

多分亡くなったのは爺さんだと思う。証拠など無いが、心中で確信はしていた。

今も不思議に思う。あの少女は、黒と白の幕を、弔問客が涙を流しながら屋敷に入っていく光景を自分に見せて何を知らせようとしているのだろう。

何をしていたのか全然判らない。

もしかして、葬式屋の娘さんだったのではないかとさえ思う。

いくらなんでも、遠回しに伝えすぎだった。

やはり昨日の事は何かの見間違いで、真夏の夜の夢…もとい、季節外れの冬の夜の夢であり、幻だったんじゃないのだろうか。

机の横側にあるフックにかけてあるバッグの中を探る。いつも入っているはずの使われないスポーツタオルは入っていない。昨日の出来事は冬の夜の夢でも、幻でも無かったのだ、と再確認する時だった。

今やスポーツタオルが、昨日と今日を、自分とテルルを結んだ唯一の接点だった。

勇一は手元に無いスポーツタオルの代わりにノートパソコンを出して、起動させる。せっかくなので脚本を早めに完成させてしまおうと思ったからだ。あと少しで完成する。今日中には部長に提出できるはず。桜緑祭までの負担を少しでも減らさなければならぬ。

キーを叩く。二ノ宮はこの時期から必死で勉強しているし、森岡は仁美にくつついて近頃のネットゲームについて議論しているし、クラスは自習という名目で意味の無い時間をそれぞれ各々の過ごし方をしている。

見渡せば、いつもと変わらない日常だった。その中に自分もいる。考えすぎなのだろう。今はただ、桜緑際に向けて動いている方がいいのだ。

勇一はタオルの事も、昨日の事も忘れるために、キーを叩き続けた。

放課後、出来上がった脚本の入ったCDを部長に届けるため、勇一は三階にある部室に向かう。部室に行くのはかなり久しいので、なんだか緊張する。

「演劇部」とボードのかかった部室のドアを開けると、潔癖な人だったら、鳥肌でも立ってしまうだろう、凄惨たる光景が広がっていた。はさみやら布やら、床にも机にも色とりどりの衣装を作るための道具や材料が散っていた。

イベント前の演劇部部室と言うのは、この学校では伝統的にこんな状態なので、勇一はさしたる反応も見せず、足の踏み場も無い状

態の床を少し片付けて踏み場を作ろうとする。

「あ、ああつ、ダメだよ勇一くん、勝手に物を動かしちゃ！」

制止の声がいきなり後ろからいきなりかかったので振り返ると、瀬の辺りでゆるく結んだロングヘアが印象的な、三年一組肩書きは演劇部副部长、役職は雑用、通称みっちゃんこと水口洋子がオロオロしながら立っていた。

「すみません、足の置く場所が無いので、少し片付けようかと」

「絶対、絶対ダメ。物の配置が少し変わっていても、私のせいにされちゃうんだからあゝ」。日向くんのおしおきは怖いんだから、勇一くんも、変な意地悪はしないで？」

この言葉には、苦笑しか返せなかった。日向部長の水口に対するおしおき、通称イジメは見た事はないが、相当なものらしい。部のメンバーの一説によれば、彼女は『もうお嫁にいけないようなことをまでされてしまったとも聞くが、内容を聞いたときは確かに驚いてしまった。』

とても とても、自分の口からは言えそうに無いことである。

冗談でも、美月に話したら一発で怒りそうな、そんな話である。

ていうか、個人的に彼女はかなりおいしい位置にいるとは思うのだが。

「意地悪なんかしませんよ。みっちゃん先輩がそういうのだったら、部室はこの状態のまま保存しておきます。しかし、それにしても他の部員達遅いですね、何をやっているのだから」

勇一は肩をすくめる。演劇部の部員数は全二十五名、うち勇一は休部中、美月は入院中、森岡はサボりで、残りの二十二名は毎日顔

を合わせることになっている。

ついに部長に反乱よろしくデモでも起こしたのかな、と勇一は思ったが、

「みんなは外で発声とか、体力づくりのために走ってるよ。そういえば、勇一くん部室来るの久しぶりだね。ここに来たった事は、脚本が出来上がったって事かな？」

「うん。完成した。先輩、悪いんですけど、部長にこのCD渡しておいてくれませんか？俺、美月のところに早く行かなければならないので」

「判ったわ。勇一くんもすごい健気よね。私じゃ真似できないわ。私もよくお見舞いに行くけど、忙しくて毎日なんてとても行けないもの」

水口は勇一からCDを受け取ると、こう言って笑った。軽く咳込みもした。

彼女のようなセリフは様々な人から言われてきた。二ノ宮を初めとしたクラスメート、部員、病院の看護士達。言わないのは、森岡と主治医の先生である暮林くらいだ。勇一には、この言葉には微かに哀れみとか、同情の念が入っていることを知っていて、言われたら苦笑を返すようにしていた。テレビに映る政府の意見に文句を言うのと同じ。言っても何が変わるわけでもなく、気休めにもならない。ただ自分と美月の心に小さな傷跡が残るだけ。

だから、苦笑して傷跡を隠そうとする。

「健気なんかじゃありませんよ。オレはただ、昔美月がやっていたことをやり返しているだけです」

「ああ……、そっか。ごめんなさい。変なこと言っちゃって。許してね」

水口は両手を合わせてぺこぺこ頭を下げる。勇一の言葉の意図を理解できたからだ。

「まあ、俺から見させてもらえば、みつちゃん先輩の方が健気に見えるですけどね、日向部長にあれだけいじめられてるといふ噂がありながら、いつも一緒にいるんですから」

「えへへ……。健気、か。うん。言われてみれば、そうかもしれないかな」

彼女は笑ってから、突然咳をし始めた。

「だ、大丈夫ですか？」

「うん……。大丈夫……。ちよこつと……。ごめんね……」

彼女は途切れ途切れに言い、勇一に背を向けて手で口を覆い、とても大丈夫そうに見えない咳を苦しそうにし続ける。だが、良くなる所かだんだん酷くなってくる。ついにもう片方の手で胸を押さえ、とても普通には見えない咳をしている。立っているのも辛いらしく、膝を床につけて尚もし続ける。あまりにも酷かったので、思わず声を荒げて「大丈夫ですかっ！」と何度も訊いてしまう。

オロオロしながらも何かできないかと混乱する頭で考え、今できることとして彼女の咳をし始める。

頭の中は多分、酷く混乱していたと思う。

随分と長い時間がたったと思った。それ位勇一の神経は緊張していたのかもしれない。

彼女の席は少しずつ治まっていき、話をできる状態まで回復した。

彼女は口を押さえていた手を話し、ぐっ、と握り締めて、未だ背を

さすっっている勇一に振り返る。

「ありがとう、もう大丈夫だから」

勇一は背から手を離すと、彼女はゆっくりと立ち上がり、額に汗のたまった青白い顔で力無く微笑んだ。

微かに、鉄のような匂いがした。

「本当に大丈夫ですか？ 保健室に行った方が…」

「大丈夫よ、一人で行けるわ。それよりもほら、美月ちゃんのところへ早く行かなきゃ行けないんでしょ？ 急がないと面会時間も過ぎちゃうわ」

水口は胸を押さえていた左手で勇一を押して部室から追放するように出してしまう。その力はとても青白い顔の人の力とは思えなかった。心配しないで、ということを示したいのだろうか。

部室の扉が静かに閉められる。

本当にこのまま行ってしまったって良いのだろうか？ 背をさすった時に制服越しに感じた脂汗で湿りかけた背中を、咳が止んだあと握り締めたまま決して開かれる事の無かった右手を、鉄の匂いと、青白い顔で力無く笑った顔を断片的に思い出した。

大丈夫なんかじゃないだろう。

思い切って扉を開けると、右手をポケットティッシュでふいている水口の姿があった。扉の開く音に反応してこちらを振り返っている。まだ少し顔は青白いが、もう席はしていなかった。彼女はティ

ツシュで吹く動きを止めて、首を傾げる。

「ど、どうしたの？ 何か忘れ物でもした？」

「え、いや……、何でもないです」

勇一はなんだか恥ずかしくなつて扉を閉め、部屋から逃げるように小走りでその場を後にする。

小走りをしながら勇一は少し安堵して、少し不安を覚えていた。

扉を開けた時、色とりどりの布の上に水口が立っていて、その手にこびりついた血をティッシュで拭いている。これ程までに非現実感があり、扉の向こうは異世界と考えてしまふ程なのに、どこかシユールだと感じてしまふのはなぜだろう。

永遠に解けない謎なのだろう、多分。人間の感覚は実に奇妙に創り上げられているから。

喉元通れば熱さ忘れるとは誰が作った言葉が知らないが、実に素晴らしい言葉だ。人間の感覚を的確に表している。勇一が下駄箱で靴を履き替える頃には、先ほどの混乱もどこへやら、すっかり頭の中は落ち着きを取り戻していた。

昨日より数十分送れて校門が出る。早く美月のところへ行かないと拗ねてしまつて手に負えなくなつてしまふ。

まさかさっきの事を遅れた理由に使うわけにもいかない。うまい言い訳を考えなければ。

勇一は混乱の後で血液の巡りが良くなつた様に感じる頭を働かせながら、いつものように黙々と歩いて水口総合病院へと向かった。

「朱、白、ひとり」

「そっか。脚本完成しちゃったんだ。良かったね。お疲れさま」

病室に入ってからそろそろ一時間が経とうとした頃、ようやく機嫌を直した美月は、料理雑誌を読む勇一に告げた。

内心ほっとした。一時間前の美月の様子は、

「……遅いです。何をやっていたのですか？ 佐倉勇一くん？」

「女性を、しかもこんなかわゆい女の子を一時間近く待たせるなんて、いい度胸していますね勇一くん。一体何があつたのか教えてもらいましょうか？」

はつきり言つて怖い。半分笑いながら言っているのにさらに怖い。たいした言い訳も考え付けず、やはり水口の事はいえなかったの。でここは一言、

「それは年頃の男子の秘密ということで」

さすがにこの言葉はまずかつたのか、美月は今の今まで口を利いてくれなかった。

一応脚本が完成した事を伝え、ノートを渡して彼女が話しかけてくれるまで雑誌を読んでいながら待っていたのだが、どうやらその甲斐はあつたらしい。

勇一は顔を本から上げ、ノートのページを静かにめくる美月の顔

を見た。口では良かったね、と言いつつも、誰の目から見ても明らかに残念だ、と言う表情を見せている。とても良かったと本心から言っているようには見えない。

それもそうかもしれない。彼女は明日から一人きりなのだ。桜緑祭の日まで、この白くて殺風景な部屋に一人きり。たまに来る看護士も白衣を身にまとっている。気が狂いそうだ。白は汚れ無き物の象徴と言うが、自分はとてもそう信じる事はできない。だったら何色が相応しいのか、と聞かれると考えることができない。この世に汚れ亡き者など存在しないのだから、色に例えることなどできない、と答えるのだろうと思う。

要するに、勇一は白が嫌いだった、
白い世界に一人ぽつんと取り残されているような美月に声をかける。

「いろいろ考えたんだけどさ」

「明日から来なくていいからね」

勇一が本題を切り出す前に、美月は彼に意見を言わせないと思ったのか、言葉を遮った。

口をつぐんでしまった勇一に、美月はさらに言葉を紡ぐ。

「脚本が完成しちゃったら、劇の練習に忙しくなるでしょ？ だから、桜緑祭が終わるまでは来なくても大丈夫だから。うん。これは、私からの頼みごと」

美月はノートから顔を上げ、昨日とは違い澄み切った空を映す窓を見てしまう。そのせいで表情を読み取ることとはできなかった。

「でもさ、何日に一回くらいは来れるって。別にオレ主役を演じるわけでもないからさ。脇役中の脇役だし」

「来なくていいの!」

いきなりの美月の大声が室内の空気と勇一を震わせた。彼女はゆっくりと、呆気に取りられている勇一の顔を見て微笑する。

「勇一に迷惑かけたくないのよ、うん。大丈夫、来なくていいって言ったけどさ、桜緑祭が終わるまでの三週間、たったそれだけの間我慢すればいいんだから」

この言葉はむしろ、勇一に言っているというよりも、美月が自身に言い聞かせていると言っ感じがしたが、敢えて口には出さなかった。

「判った。美月が言うのなら、オレはそれに従うよ。なんたって、オレは美月の下僕だから」

迷惑でもなんでもない。だが、美月の意見が最大限に尊重してきたかった。

「ありがとう。私さ、桜緑祭のときに、勇一が手がけた最高の劇を見てみたいのよ。勇一の言おうとしていたこと、当ててみせよっか? 私を桜緑祭のときに病院から連れ出そうとでもしているんじゃない?」

「…正解」

心の中で君はエスパーですか、と付け加えておく。

「暮林ドクターにでも頼んでみようと思う。あの人なら、オレの意

見も聞いてくれると思うしさ。いろいろ考えたけど、美月を桜緑際へ連れ出した方がいいでしょ？」

勇一は名案と思いついたばかりに自分の案に自信があるのか、誇るように笑う。

だが、反面美月の表情は固かった。少なくとも、笑っていない。勇一は彼女の表情の変化に敏感に気づき、不思議そうに彼女の顔を見る。

「あれ？ いい考えかと思ったけど、なんか駄目そうな部分とかある？」

「え？ いや、その、違うの。暮林先生がオーケーしてくれたらいいなって考えていたのよ。ただそれだけ」

そう笑ってノートに目を戻す美月の様子がいつもと少しおかしいように思えた。

まるで、無理に元気を装っているように見えたのだ。

まるで自分に何かを悟られたくないと思っっているように感じたからだ。

日が、西に傾いて世界を淡い橙に染め上げていた。その光は窓を通して病室の中にまで届き、白い世界を一時的に橙色に染め上げる。橙色というよりは、赤。鮮血を思わせる赤い色。

赤く染め上げられたベッドの上に、緋水美月は上半身を起こして座っている。

たったそれだけなのに、勇一は恐怖を感じた。

寒気がして、背筋を軽く震わせた。

ベッドから窓の方へ目を向ける。赤い光を見て、なぜか昨日の、

テルルを思い出した。

彼女の紅い瞳を思い出した。

あれは多分、カラーコンタクトではないのだろう。

頭の中で芽生えた僅かな確信。こんな時に確信を持つなんて思いもよらなかった。

彼女は、テルルは多分、人間じゃないのだろう。もちろん、動くフランス人形でもないだろう。

なぜ、昨日会った時に確信を持たなかったのだろう。案外人間は、不可知なる物に出会って、適当なこじつけをつけて、夢だ幻だと決め付けて逃げ去ってしまう。自分も実際そうだった。真剣に見ようとは思わず、面白半分に科学で理由をつけて片付けてしまう。霊能力者を馬鹿にする。自分もそんな者の中の一人だったのかもしれない。幽霊番組を見て一時の涼しさを味わったり、肝試しをして友人の体験談をして友人と体験談をもとに笑いあったりしていた人間だったのかもしれない。

でも。

もう、笑うことはできないだろう。確信を持った、ただそれだけで。

「勇一、大丈夫？ 勇一ったら！」

ぱっちーん。

一気に現実まで引き戻された。頬を引つ叩かれた。痛くなかったので痛いとは言わない。代わりに美月が手をさすって痛がっているのが彼女らしい。「いたいいたいのとんでけ！」とかからかってあげてもよさそうだが、今度は手ではなくて何が飛んでくるのか判らないのでやめておく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4317b/>

「天使の唄」

2011年1月15日23時51分発行